

ぶぞく新聞

4月20日(金)

Vol. 1
(Vol.78)

子ども達はわかっている

十九年度が始まりました。今年も子ども達から大切なことを学べたらと思っています。

入園式から数日後のことでした。お片付け後に年長組の部屋に年少組の男の子が入ってきました。何もかも新鮮に見えるはずです。その園児は箸つかみ用の豆を見るとすぐに口に入れて、**ペツ**と吐き出していました。その後、カタツムリにかける霧吹きを手にしてあちこちに水を撒き散らしていました。

それを見た二人の年長児(共に弟・妹がいます)が、**先生大変だあ!**と笑いながらやって来たのです。その二人は決して怒ったりせず、笑いながら**永があちこちに・・・豆食べちゃったあ**と言うのです。僕はその笑顔に嬉しく思いました。年下の子を思いやる気持ち、言われなくても・・・。

ダメだよと確かに注意は必要ですが、今回のような場面は、頭ごなしに怒る事はないと思うのです。子ども達はそれを分かっているから、笑いながらなのです。

他にも **おー!**と思う場面がありました。子ども達を順番にセフティーマットの上に投げていく遊びをしていると次々に子ども達が **先生、僕も**とやって来ました。順番なんだよね」と言つて **並んでね**と声を掛けました。まだ入園したばかりなのに、ちゃんと並んで待っているのです。十人以上も並んでいたのに・・・。ね、ちゃんと順番も、待つことも分かっているのです

更にバスでの事です。泣いている新入園児がいました。うるさいはずですが、でもその園児に対して **いいよ大丈夫だよ**と声を掛けていました。その園児も昨年度泣いていました。そのやさしさが自然で温かったです。

独り言

今年度も『ぶぞく新聞』を書かせて頂きます。

『ぶぞく新聞』って何?と思われる方、それは、年数は重ねたものの、子ども達の助けを常に借りながら日々保育をしている幼稚園教諭が、子ども達と遊び、過ごさせてもらった中で感じたことを思うがままに書いたものです。

当園の方針は『子ども達の遊びを応援する幼稚園』です。その応援方法の一つとして、この『ぶぞく新聞』を通して子ども達の気持ち・言い分・心等々を父母の方に伝えていきたいと思っています。勿論これらが全て正しいわけではありません。でも少し、ほんの少しでもいいので頭の片隅にという願いもあります。

柿原 勝

KIDS FIRST

ふぞく新聞

5月18日(金)

Vol. 2
(Vol.79)

上段の「ギッズ・ファースト」子どもが第一」とは幼児教育がとても大切だという観点にたつて実践しているニュージーランドの幼稚園の標語です。ほんの一部ですが、ニュージーランドの幼稚園や保育園(日本でいう)を見学させてもらいました。

言葉は通じなくても、遊びは成り立つということがまず一番の感動でした。固定遊具と一緒に遊んだり、僕の体にスタンプを押して遊んだりしていた子ども達の「むっとして!」「僕もして!」「ごっちに来て!」は日本の子ども達と全く同じでとてもかわいかったです。

一番の違いは、全体がゆったりしているところでした。園児の人数に対する職員の人数を日本も考え直すべきだなあ……と思いました。

他にも色々な場面がありました。絵は描きたい時に描いていました。(本当のところは英語がわからないので言い切れませんが……)自由画帳ではなく、画家のような本格的な台があつて、そこに絵の具で描いていくのです。確かに床等は汚くなり、掃除は大変そうでしたが、子ども達の姿を見ているとそれが大事だよなあ……と思いました。

音楽をかける際に、先生が間違えて違う曲をかけてしまったのです。その時のリアクションの「ギャー、今の曲はなんだ!」は日本の子ども達と全く同じでした。

全体で遊びが始まった際に、数人の子ども達はその遊びに入ろうとはしませんでしたが、先生方も決して無理に誘ったりしませんでした。見ていると途中から自分で入っていく子もいました。そういう雰囲気があると安心できるのかなあ……と思いました。

独り言

久しぶりの緊張でした。言葉が通じないから、もしかしたら全く子ども達と関われないかも……と思いました。そんな不安をすぐに吹き飛ばしてくれたのは『遊び』でした。

シャボン玉をしているところに顔を出しました。何を言っているのかよくわからなかったのですが、何かを僕に訴えていたので、ジャンプしてつかもうとしました。その後口で息を吹いて飛ばしたり、シャボン玉に当たったら倒れたりしました。気付くとたくさんの子ども達に囲まれていました。やはり『遊び』は深いですね。

今回の内容ですが、英語力のなさから間違いがあつてもご了承下さい。

柿原 勝

ふぞく新聞

6月1日(金)

Vol. 3
(Vol.80)

遊びがはじまりやあ！！

今の世の中は、『子育て情報』が山ほどあって、正直何を信じればよいのか、何から始めればよいのかとても分かりづらいつ感じています。ただでさえ大変なお母さん方を更に困惑させている気さえします。

子ども達と一緒に関わってきて感じるのは、幼児期は「睡眠」「食」「遊び」の三つがとても大切だと思います。

この三つは決して単独で成り立っているものではないと思うのです。

たくさん体を使って遊んだ後、**先生、お腹すいた！**と言ってお弁当をすぐに食べ終えている子を見かけます。何でも好き嫌いせず食べようと声を掛けるのも大事ですが、それらもお腹がすかないことには始まらないと思うのです。

良い循環は更に続きます。食べるから又元気になる、お昼の後も体を使った遊びがたくさん出来ます。**つかれたあ〜**と言ってすぐにやめてしまつともありません。

遊び』は遊びこんでこそ面白さが実感できるのです、その遊びの魅力に取り付かれて**もっとしよう！**と子ども達から自然と声が出がります。

たくさん遊んだ後はお腹がすくので、晩ご飯もたくさん食べます。そしてたくさん遊び、ご飯をしっかり食べた子は自然と眠くなるものです。最近の統計によると十時近くまで起きている幼児が大勢いるとか…。

(確かに色々諸事情があるのですが)眠くなるから寝るのは自然なこと、そしてたっぷり寝ることで翌朝も元気になり、又遊べるのです。

遊び』が良い循環の始まりなのです。

独り言

『食べる』ということですが、始めは好きなものだけでよいから残さず全部食べるといふところから始めてもよいかと思ひます。

お弁当のふたを開けた瞬間、嫌いな物が入っていると気持ち「ガクン」と落ちてなかなか進まない子をよく見かけます。子ども達だって、本心は全部食べたと思つていふのです。(隠そうとしたり、困つたりしているのは先生に食べなさいと言われるからだけでは無いのです)

全部食べきれた時に見せる笑顔は最高で、その時に「きれいに食べたね」と声を掛けることで、そのうち少し苦手な物が入ついても食べべれたりするのです。

柿原 勝

ふぞく新聞

6月18日(月)

Vol. 4
(Vol.81)

「○○して！！」と言えるまで

六月に入り、子ども達は色々と周りが見えてきたようです。戦い「っこ」に入ってくる年中さん。虫捕り『エビ捕り』に参加して楽しんでいる年長さん。色水遊びを満喫している年中少さん。花を摘んで遊んでいる女の子等々。

最近、**ねえ、先生僕も肩車して！**と今まで言っていなかった子に声を掛けられるようになりました。その子達の本当の気持ちは分かりませんが、きっと**僕も年長さんの○○君みたいにしたいなあ。でも自分で言うのは恥ずかしいなあ。でもして欲しいなあ。思い切って言ってみよう！**といったところではないでしょうか？

僕は、今まで言えなかった子が自分から**○○して**とやってきて、先生に**「いいよ」**と言われた瞬間の笑顔がとても大好きです。

子ども達って、色々なことを子ども達なりに考えているのです。大人にしてみたら自分で言ってみたらいいじゃない？」「言え、ばすぐに何とかなるわよ」ということも、**もし断られたらどうしよう・・・」「もし相手が気付いてくれなかったらどうしよう・・・」**と悩んでいるのです。

そんな心の葛藤があつて、それでもして欲しいという思いがあつて**「○○して」**と言っているのです。

その思いが通じると、子ども達は何度も何度も言ってきます。**ねえ、肩車して」「ねえ、おんぶして」「ねえ、抱っこして」と、この言葉を受け入れているのは、そんな子ども達との奥にある気持ちを受け入れたいからなのです。年少さんが日替わりで抱っこ！**と先生に言えるようになってきました。受け入れて、そこから信頼関係を築いていくのです。

独り言

現在、幼稚園に短大生が実習に来ています。

短大生は「緊張します」とか「研究保育（＝実習生が担任と代わって一日を担当する日）が心配です」とよく言います。

そんな短大生に意図的に声を掛けるようにしているのは、「何気なく過ごしている姿」朝の登園の姿」についてです。

毎朝、当たり前のように元氣に部屋に入ってくる子は、「以前は、なかなかお部屋に入ってくる事が出来なかったんだよ」と伝え、とても驚きます。

出来て当たり前、何かが出来たら次は・・・ではなく、もっとゆっくり寄り添っていきたいと思うのです。「視野は広く深く！」**柿原 勝**

ふぞく新聞

6月30日(土)

Vol. 5

(Vol.82)

見せるためだけの行事に・・・

もうすぐ、ふぞく幼稚園の運動会です。運動会の練習を楽しんで行っている子ども達の姿をみるとつい最近までお母さんと離れることさえ大変だったのに・・・とか年長さんは本当に遅くなったなあ」等々嬉しく思います。そんな中、**先生、僕ヨサコイのお遊戯やりたくない**という子がいました。

さて、これに似たような場面、お家でも山ほどあると思います。そんな時皆さんはどう対処しているのでしょうか？又、どういう思いなのでしょうか？

今回の対応が全てではないことを前提で僕の個人的な考え方や接し方を書きたいと思います。まず第一歩は**やりたくない**と言えたその子に拍手を！

上段の続きです。**やりたくない**という言葉
葉を聞くと「えー」と大きく反応しがちです。でもそんなときこそ大きく構え、先を見て欲しいと思うのです。

やりたくないという意味表示も出来ず、
一人悩み、運動会の練習以外の好きなことも嫌になってしまうことだってあるのです。

運動会の練習が出来ない(をしない)とダメで、入園当初歌えた朝の歌なんてどうでもいい、自由遊びで伸び伸び遊ぶよりもみんなと同じように踊らなきゃダメ。動きも揃ってないとダメ。『つてちよつと極端ですが、運動会やお遊戯会といった大きな行事にはそれほどの力(影響力)があるのです。

だからこそ、ふぞく幼稚園は、行事は見せるためだけのものではあってはならない』という考えのもと行っているのです。大きなことも**あ、やりたい**と思えるよう・・・。

つづき

さて、話戻って「**やりたくない**」という子に対しての接し方ですが、僕はこんなときこそクラスの子(集団力)に頼るのです。
「ねえ、ヨサコイ嫌いなんだってそれってダメなこと？」とみんなに問いかけます。「**ダメじゃない。僕もあまり好きじゃない**」とか「**私は縄跳びが嫌だ**」とか色々な意見が挙がります。「そうだね。ダメじゃないよね。」と話したりします。
「やりたくないのは分かるし、ダメじゃないけど、きりんさんみんなでしているの！」「練習の時、時々見るのはいけど、みんなでするときはしようね」と話しました。大切なのは「強制的」「絶対」じゃないということです。柿原 勝

ふぞく新聞

7月13日(金)

Vol. 6
(Vol.83)

縄跳びの姿から・・・

ふぞく幼稚園は縄跳びをする際に、みんなに縄跳びがんばり表」という用紙もあげます。その表の中には、**「まえとび2かい」・「おおなみこなみ」・「まえとび10かい」**等と書かれていて、跳べるとシールが貼れるようになっていきます。このがんばり表の良いところは、自分で目標を決めて、それに向かって取り組めるところです。自分で**「先生、これしてみる！」**と言ってチャレンジしている姿をよく見かけます。保育者がアドバイスして跳べる場合もありますが、僕は自分で決めているという姿勢をととても大切にしています。自分で決めた目標を達成した時の満足そうな表情と、先生に言われた跳び方を跳べた時の表情は同じようにシールが貼れたとしても意味が違ふようです。

上段の他にも、色々な姿を子ども達は見せます。前跳びは苦手でも、後ろ跳びが得意な子もいます。その子は後ろ跳びの「ろを」をどんどん跳んでシールを増やしていきます。そんな姿をみて僕は「いいぞ、それだけ後ろ跳びが上手なら前跳びも跳べるって」とアドバイスをしそうになりますが、ぐっと我慢して「〇〇ちゃんは後ろ跳び名人だねえ」と声を掛けると、とても嬉しそうに笑っていました。(後ろ跳びで自信をつけたその子は、ある日自分から前跳びをしてみ、今では色々な跳び方を楽しんでいます) ついついマルチな方が良いという考え方を大人は押し付けがちです。個性を伸ばすと言っているのは、このような場面でも同じだと思います。気をつけないと……。

勿論、全く縄跳びに興味・関心を示さない子もいます。それも良いのです！

つづき

縄跳びを数えていて思うことは、「まだ五歳なのに、よく跳べるなあ」です。でも、跳べるようになるのは、どうやら個人の努力だけではないことが分かりました。

ある園児は、「〇君が跳び方を教えてくれたから出来た」と僕に報告にきました。

別な園児は、「△ちゃんが応援してくれたから、疲れてもうダメだと思ったけど跳べた」と教えてくれました。

更に、「□君みたいにならなとびが跳びたいから練習してみたら、出来た」という声も聞きました。

大人よりも子ども同士で刺激し合い、支え合っているのです。「良いでしょ、この関係。」集団の力であるのです。柿原 勝

ふぞく新聞

8月31日(金)

Vol. 7
(Vol.84)

見通しを持てることの意味

夏休み中の園開放日での出来事です。子ども達と遊んでいると、先生、今長い針どこ？」と声を掛けられました。

いつも子ども達に「長い針が〇〇になったらお片付けだよ」とか「長い針が△△になったらお出掛けするからね」と声を掛けているので、そのように聞いてきたのでしようが、これってとっても凄いことなのです。(この園児は四歳児でしたが、在籍期間が長いので納得です。)

何が凄いって、**見通しを持って遊んでいるという事です**』

この園児は、今長い針『8』だから」と答える**とひやまだする**」と言って鬼ごっこを続けていました。「え？そんなの当たり前じゃないですか？」と思っている方、そんなこと無いのです。

大人は様々な経験から、「こんな時は、次はこうなる」とか「もうすぐ話が終わりそうだから、そろそろ帰る準備をしよう」と頭の中で考えて、自分の気持ちを整理することが出来ますが、経験が少ない園児達はどうはいかないのです。(大人も実は同じで、初めての海外や初めてのイベントなんて周りの人を見たり、真似したりしますよね)だから不安になったり、心配したりするのです。見通しが持てるようになると安心から**自信**も生まれてきます。

見通しを持てるようになるには、まずは経験・体験が大切です。現在の子ども達は、大人が先走ってしまうこと(無駄なことはさせない。何でも合理的に行う)で分かった気になっているだけで、実感が無い場合が多いの**です**。そういう意味で、子ども達には体験する機会を沢山与えていくべきなのです。

独り言

特別支援教育という言葉をあちこちで耳にするようになりました。どうやら言葉だけでは少しづつ定着してきた感じがしますが、中身についてはまだまだ理解されていないように感じます。

「ゆとり教育」と同じような感覚で、数年後には撤回されると思っている方もいるのかもしれませんが、個人的に全く違うものだと思います。というよりも、「**これからのスタイル**」なんだと思っています。従来のやり方が全部悪いなんて思っていないですが、何故進学するに従って勉強が嫌になるのでしょうか？「学ぶ事」は本来楽しいことなのに……。この続きは次回に。

柿原 勝

子ども達って、ホンマに かわいいでしょ！！

ふぞく新聞

9月13日(木)

Vol. 8
(Vol.85)

ふぞく祭(バザー)での出来事です。最後に、幼稚園の先生が出し物で簡単な劇を披露しました。その時に、僕が簡単な変装をしたのです。顔が見えていて、明らかに僕だと分かる変装(黒の全身タイツを着たのです)だったのですが、子ども達は着替え終わった僕のところ嬉しそうにやって来て「**ねえ、さっきのお片付けマン(劇のヒーローの名前)まさる先生なんでしょ！**」と言うのです。

大人にしてみたら「どう見たって勝先生」というのが感想ですが、子ども達の感覚は違うのです。劇のヒーローは別物なのです。(子ども達は想像の世界を楽しめる生き物なのです)

【**正体は(わかっているんだから！**」と言いに来る子ども達ってホンマにかわいいでしょ！

上段の続きはまだありまして、月曜日にお部屋を綺麗に片付けていたので、ありがとう「お片付けマンとの約束もちゃんと守ってるね」と声を掛けると**私、先生が着替えてるところ見ちゃったもんね。だから知ってるんだあ、お片付けマンは先生だって！**と年長さんが言うのです。

更に、おもちゃをロッカーの上に置いていた**らっくら、お片付けマン、ちゃんと片付けてないぞ！**と僕を注意するのです。

幼稚園では一番大きい年長さんですが、まだまだ5歳・6歳「のかわいい子ども達なのです。

そう思ったら、もう年長さんなんだから〇〇くらいしなさい」等と言った声掛けも減りますよね。

子ども達のそんなかわいらしい面をもっともっと大人は楽しんで良いと思うのです。

独り言

前回の特別支援教育についての続きです。(前回を読んでもから今回へ)

「学ぶ事」が楽しくなくなる理由は色々ありますよね。「分かっていないことを何度もやらされる」「好奇心や向上心がなくなりますよね」「分からないのに詳しく教えてくれずどんどん進んでいく」「やる気があつたとしても、失せてしまう」「学ぶことの意味を教えてください」(「計算だけ出来たら良いとか字が書けたら良いではなく、それらを覚えることによる面白さ、便利さを教えることが大切)従来の方法が全て悪いとは思っていませんが、そのまま良いとも思えません。だから意識を変えます。

つづく…**柿原 勝**

ふぞく新聞

10月1日(月)

Vol. 9
(Vol.86)

子育ては『引き算』ではなく 『足し算』の方が良い

この間、ある学習会で子ども達について話し合っていました。その際にとっても分かりやすく、素敵な言葉を頂きました。

子育ては『引き算』じゃなくて、『足し算』が良いの」という言葉でした。

逆算することが悪いなんて思っていないません。以前書いた「見通しを持つこと」は逆算そのものです。では、何が言いたいかというと、子ども達に声を掛ける際、子ども達の活動を見守る際、足し算の発想で声を掛けたり、見守っていくと良い『ということ』です。

「まだ出来ないの？」と「あら、昨日より上手になってるわね」は同じ場面での声掛けです。

子ども達は『零』を一生懸命生きているのですから、まずそのことを認めて欲しいのです。

その学習会で、ある先生が「子育てがとても上手なお母さんをあちこちで見かける」とお話されていました。

具体的にどのようなところが上手なのかをここで紹介すると、靴下を履かせる際に、つま先だけ（＝難しいところは）大人が手伝ってあげて、残りは自分でさせる（＝自分で出来た気持ちにさせる）お母さん（『見本として』片方だけ履かせてあげて、もう片方は自分でさせるお母さん』とのことでした。また、その接し方がとても自然であったこともお話されていました。

勿論、自分で「やりたい」と言っているのに手伝う必要はありません。やって」と言われた際にやってあげることは大切です。でもその続きに「じゃあ、ここまではしてあげるね」と言ってステップアップしていくことも大切なことなのです。焦らずゆっくりと！

独り言

前回の特別支援教育についての続きです。（前回を読んでもから今回へ）

何故、学校が意識を変えないといけないかという、教育環境が激変してきたからです。幼児期から勉強をさせる園もあります。塾に行くのも珍しいことではなくなってきました。かなり小学校の段階で差が生まれているのです。今までの「一斉」というやり方にはかなり無理が出てきたのです。

集団だからこその育つもの（＝集団力）はあります。

個別対応のみを重視すれば良いなんて思っていないません。どちらも必要なのです。そのバランスをとっていく教育スタイルこそが特別支援教育なのです。つづく

： 柿原 勝

ふぞく新聞

10月12日(金)

Vol. 10
(Vol.87)

遊びは『学び』！！

九月下旬、釧路で私立幼稚園の研究大会が開催されました。

その研究発表の中でとても分りやすい言葉があつたので紹介したいと思います。

小学校の教科教育「学び」の根っこは、幼児教育の「遊び」に繋がっている』です。

よく保護者の皆さんから、幼児期くらいはのびのび遊ばせてあげたい」小学校に行ったら勉強ばかりだから・・・といった声を聞きます。

遊びを応援しているふぞく幼稚園としては、嬉しいのですが、幼稚園が考えている「遊び」はもっと大きく、深いものであることも知って頂きたいと思っています。

大人の「遊び」の概念は「遊びと仕事」「遊びと学習」といった対極概念ですが、違うのです！

子ども達にとって、**遊び**は仕事のようなもののなのです。対極ではなく、イコールなものなのです。遊びの中には全て(科学・数字・言葉・表現・健康・人間関係・社会・ルール・道徳)が詰まっているのです。

上段にある 幼児期くらいは・・・」はではなく、幼児期にたくさん遊んだ子ほど、遊び込んだ子ほど、**知恵**が身についているのです。知恵は色々な広がりを見せます。応用力が効きます。遊びの延長に教育があるのです。(遊びと教育は連続しているのです)

遊び」が根っこという表現はとても意味が深く、地上に大きな木があるということとは、それだけ根がしっかりしているということなのです。

ここで重要になってくるのが、遊びの質が問われているということです。この質を高めるのが保育者の仕事なのです。

独り言

前回の特別支援教育についての続きです。(前回を読んでもから今回へ)

集団と個別のバランスをとっていくには、こども達をよく見なくては出来ません。知らなくては出来ません。担当教諭一人で全部しよいこんでやろうとすれば、絶対に負担大でパンクしてしまいます。

連携をとるので、ネットワークを活用するので、この発想がないと絶対に出来ません。幼稚園と小学校が「お互いの批判をし合っているなら、犠牲になるのは、一番大切な子ども達です」連携は小学校だけでなく、色々な専門機関も巻き込むのです。この発想が大切なのです。つづく...

柿原 勝

ふぞく新聞

10月26日(金)

Vol. 11

(Vol.88)

想像の世界で遊ぶ

子ども達とよく新聞紙の剣を使って遊んでいます。その遊びのモデルとなっているのは、ダンブえんちようやつつけた』(童心社)という絵本の中の海賊ごっこなのです。

この間、その海賊ごっこにぴったりの公園(船公園と呼んでいます)に遊びに行きました。

二つのチームに分かれて、海賊船の上で宝物(花や偶然拾った一円玉)をめぐる遊びです。

そういう時の子ども達は、大人とは違って、その世界にみんなで入り込めるのです。

船から落ちた時は海(＝大人にとっては草です)なので、溺れないように泳いで船に戻ります。子ども達は、この想像の世界に出入り自由のフリーパスを持っているのです。この柔軟さを大人は見習いたいです。

想像の世界に入り込める子ども達だからこそ、ナンセンス(意味をなさないこと。無意味であること)の意)絵本を楽しめるのです。

どうして、ブタがキャベツを食べると変な形になっちゃうの?』(絵本 早ヤベツくん)より)と大人は?』となりますが、子ども達はそんなことおかまいなしで、アハハ・・・と大笑いします。

どうして、ごろごろにやーん、ごろごろにやーんととんでいきますと同じ文章ばかりなの?』(絵本『ごろごろにやーん』より)と大人はそこにこだわりがちですが、子ども達は **まだだ!**』と言いながら絵の変化を楽しめるのです。

ナンセンス絵本を通じて、子ども達と一緒に、お母さんやお父さん方も、想像の世界を楽しめればいかがでしょうか?

読書の秋」におススメします。

独り言

前回の特別支援教育についての続きです。(前回を読んだから今回へ)

一番大切な子ども達に視点を向けて、現在の子どもの達の現状をよく理解し、そこを軸に教育環境を提供することが、特別支援教育なのです。

ここまで碎いて話をしていくと「え?そんなの当たり前のことじゃないですか!」と思いますか?

そうなんです。当たり前のことをするの、特別支援教育なのです。

決して、障害児教育の新しい呼称などではないのです。誰にとっても

当てはまる教育ユバール・デザイン

の教育(教育ジャーナリストの品

川裕香さんの言葉をお借りします)なのです。つづく... 柿原 勝

ふぞく新聞

11月9日(金)

Vol. 12
(Vol.89)

みんなの前で 発表することの意味

ふぞく幼稚園のお遊戯会が近づいてきました。
音楽に合わせて踊っている子ども達はとても楽しそうです。

さて、この子ども達は、お父さんやお母さんが見に来るから一生懸命踊っているのでしょうか？「誉めてもらえるから踊っているのでしょうか？」いえどちらも、違います。楽しいから踊っているのです「出発点は」このなのです。

「この出発点の延長線にみんなの前で発表してみよう」があるのです。

みんなの前で踊ったり、楽器の演奏をしたり、劇でセリフを言ったりするのは、緊張します。何故なら「見られてる」ということを意識するからです。この見られている中で行うことにも意味はあつて、年長さんになるとかなり意識します。

以前、運動会について書いたときに、行事は見せるためだけのものではあつてはならない』と書きました。

お遊戯会も根本は同じです。大切なのは、発表するから練習するのではなく、楽しんで行ってきた姿を見てもらうことです。

この順番が逆になってしまうことがよくあります。その代表的な言葉が見せるのだからより良く(より可愛く)というものです。

気持ちは分かりますよ。確かにその効果があることも知っています。(＝子ども達の気持ちが上がります)僕の親も孫の姿を見に行く時はそんな気持ちだそうです。

ふぞく幼稚園は、遊戯会に対してどう考えているのかというと、見せるのではなく、保護者の方には観抜いて欲しいのです「あえて観」の字を使いました。子ども達の当日の姿から、そこまでの過程を！

独り言

前回の特別支援教育についての続きです。(前回は読んでから今回へ)

前回、あえて「障害児教育の新しい呼称などではない」という言い方をしました。なぜそんな言い方をしたかというところ、そう思っている方がたくさんいるからなのです。

そこで、障害児教育を考える際に一番初歩的なところを考えてみます。「障害」って何だと思えますか？

辞書には、『①さわり・さまたげ・じゃま②身体器官に何らかのさわりがあつて機能を果たさないこと・③障害物競走の略』とあります。

辞書としては分かりますが、さて「障がい観」という角度だと、疑問です。次回につづく… 柿原 勝

ふぞく新聞

11月30日(金)

Vol. 13

(Vol.90)

お遊戯会を終えて思うこと

ふぞく幼稚園のお遊戯会が終わりました。毎年のことですが、終わった後も子ども達はステージでお遊戯を楽しそうに踊っています。

先生、〇〇の曲かけて!」と言ってステージでスタンバイしています。自分の担当したお遊戯だけではなく、他の遊戯も踊ります、踊れます。

子ども達のその姿を見て思うことは、雪日のみの行事になっていない』ということです。

数名の保護者の方から、連絡帳で子ども達の気持ちについてお知らせ頂きました。

お遊戯会がもっと後だったらいいのになあ」やお遊戯会が終わってしまっただけだ」という感想でした。ふぞく幼稚園のお遊戯会は僕にとって、今年で十回目でした。僕なりに感じたことを下段で綴りたいと思います。

子ども達が楽しく参加出来たらいいなと思っていました。でも、いつの間にか、親の評価を気にするようになっていました。

運動会の時は、かけつこの練習で負け続けても仕方ないね」とか、私も走るのが遅かったから」と言つてどこか、ありのままを受け止めてもらえない雰囲気があるのに、お遊戯会になるとそうはいかない雰囲気勝手に感じていました。

同じ練習回数でも、セリフをすぐに覚える子やリズムよく楽器を叩く子もいれば、当日もセリフをうる覚えの子や違うパートを叩き続ける子もいます。そんな様々な子の足並みを揃えようと色々声を掛けたり、時には怒ったりして、やる気にさせて覚えさせたこともありましたが。

でも、どこかしっくりこない感じがしました。楽しくないのです。子ども達の表情が明らかに違うのです。いつも伸び伸びしている子ども達から笑顔が消えていくのです。

やだよー」と反発してくれる方が、気が楽で、先生大変なんだろうな」という感じで頑張っている子ども達を見ていて、俺が、覚悟を決めよう」と思ったのです。保護者の評価よりも、子ども達の表情だ」と思ったのです。

勿論、子ども達に良いところや直すべきところは声掛けしていきます。何もしないで、ただそのまま良いなんて思っています。ただ、以前のように無理に足並みを揃えようとはしませんでした。

声は小さいけど、セリフをすぐに覚えた子がいました。声は大きいけど、自分で覚えるところまではいかない子もいました。練習を通じて、字に興味を持った子もいました。セリフを丸暗記してしまう子もいました。本当に様々でした。足並みは揃っていないけど、そこにはそれぞれの成長がありました。

終わりの挨拶の声が輪唱のようになってしまった時に、それを笑い声と笑顔で包んでくれたふぞくの保護者の皆様に大切なことを教わった気がしました。

独り言

前回の特別支援教育についての続きです。(前回を読んでから今回へ)

今回は、「障がい観」についてです。

障害というのは、そのものが障害なのではなく、その事で当事者が困っているか困っていないかが基準なのではないかという考えです。

「足が不自由で、車椅子に乗っているから障害だ」というような考えありませんか？左利きの子に、右利きのはさみを使用させると、その子はとても困ります。

その子、障害ですか？今は左利き用(ユニバーサルデザイン)の物が増えていきます。つまり何が言いたいかというと、障害そのもののよりも、環境が変わらず困っている状態が続いていることで障がいとなるのです。教育も同じで変わらなきゃ！続く柿原 勝

ふぞく新聞

12月14日(金)

Vol. 14

(Vol.91)

『平等観』って？

『障がい観』も含め意識を変えて、ユニバーサルデザインの教育にしていくながらには、教育機関側が広く、大きく、深くなる必要があります。

教育機関の変革を保護者の皆様に応援して頂く意味でも理解して欲しいことがあるのです。それは子ども達に平等に接するということの本当の意味を知って欲しいのです。

数（量）的な平等は逆に問題を生むのです」
僕の尊敬する教育大学の二宮先生は「小錦に茶碗6杯のご飯を食べさせるのと、二宮（小食なのです）に茶碗6杯のご飯を食べさせるのは平等じゃない、苦痛だ」と教えてくれました。手を握ってもらえるだけで十分な園児もいれば、しばらく抱っこしてもらわないと満足出来ない園児もいるのです。大切なのは質の平等です」

平等観については、勘違いがあつてはならないので「こ」で改めて示しておく、機会

【独り言】
前回の特別支援教育についての続きです。（前回を読んだから今回へ）

の平等は大前提である」ということです。
年長組三十五名の園児がいれば、その子達への接し方、声の掛け方はそれぞれ違うのです。違つて当たり前だし、違わなければ逆に個性を潰すことにまできてしまいます。

『障がい観』に対しての考え方が変わると、学校機関で困っているのは、「障がいがあるかないかでは無い」というところに行き着きませんか？

ある園児を誉める時に一日に何回も誉める場合があります。それは決してお世辞や嘘ではいけません。本当に良いところを見つけて何度も誉めます。そんな時子ども達はいまません。なぜなら本当に良いところと子ども達も違うからなんです。

誰もが皆、どこかで困つて、悩んで、分らずにいるのです。これを解決していこうという当たり前の姿勢が、特別支援教育の求めている

あの子だけたくさん誉めて欲しい」とは言

「全ての子ども達に学びと育ちの場を！」なのです。

みんな違つてみんないい」という言葉を実践する場合、接し方も違つてくるということ

これこそが教育ですよね。全てに

をご理解頂きたいと思うのです。

特別支援教育って素晴らしいですよ！

全員同じじゃあ、つまらないでしょ」

柿原 勝

ふぞく新聞

12月17日(月)

Vol. 15

(Vol.92)

『障がい観』って？

『ふぞく新聞』の七号から『独り言』の欄を利用して特別支援教育について、個人的な見解をずつと書かせて頂いています。

今までを読んで頂いているという前提で、続きを書かせて頂きます。

『障がい観』について話をする場合、絶対に抑えておいて欲しいことがあります。それは「ICFモデル（国際生活機能分類）」です。従来は「ICIDHモデル（国際障害分類）」だったのですが、さすが人間です、考え方が進化したのです。（人間の素晴らしさの一つは考えること）

少し難しいですが、障害は、個人が持っている要因だけでは障害ではなく、周りの環境の要因との間で生まれ、変化するものだ」という視点がICFモデルです。

上段の後半部分を、例を挙げて説明したいと思います。個人が持っている要因を例えれば、足が不自由で動かないとします。

足が不自由でも、車椅子があれば、その人は色々なところに移動することが出来ます。車椅子の人が乗れる車があれば、その行動範囲は更に広がります。しかし、車椅子がなければ（車椅子が存在しない環境だったら）その人の活動は限りなく制限されることでしょう。もう少しイメージし易いように想像して欲しいのは、車椅子があつたとしても、段差だらけの道路・店・乗り物・狭い場所だったらどうでしょうか？やはり参加できないですよ。これも環境です。そこでバリアフリーだらけだったら（＝環境が変れば）どうですか？それでもこの足が不自由で動かないことは障害なのでしょうか？ 障がい観「変わりませんか？」

独り言

障害を、足が少ししか動かないから…、全然動かないから…、という「程度」のみで捉えるのではなく、環境との関わりの中での「生活しづらさ」というところにポイントを置くのです。

「え？そんなの凄く面倒な事なのでは？」と思われる方、それは従来が多数の人の為（多数の人の為を基準）だけに設計したからで、みんなに使い易いという発想ではなかったからだけです。（ユニバーサルデザインではなかった）

ここで特別支援教育の話に戻ります。大人側の意識を変えることを言い続けてきました。が、その中には『障がい観』を変えることも勿論含まれているのです。続く…。 柿原 勝

ふぞく新聞

平成20年
1月25日(金)

Vol. 16
(Vol.93)

待つことのつづき

平成二十年の年賀状にとっても嬉しい知らせがあつたので紹介します。その知らせは、四月、家庭訪問をした時の約束の答えでもありました。

ふぞく幼稚園の年長組は、七月の運動会の種目に『縄跳び』があります。しかし、その子は全くといって良いほど縄跳びに興味・関心を示しませんでした。お母さんは当然 先生大丈夫でしょうか？やらせた方が・・・」と心配しました。

毎年、年長組の時の家庭訪問でこの質問を受けますが、「(本人がその気になっていないなら)お母さん、やらせないで！」とお願いしています。自分から興味を持っていない時期にやらせると、逆に嫌になつてしまうものなのです。

その子の年賀状には**「四十一回とべました」**と書いてありました。

上段の話には、ちゃんと過程があるので
す。ただほつたらかしにしていたのではない
のです。まず第一段階は、出来なくても、

大丈夫」です。家庭訪問でお母さんに「運動

会当日、少しだけ跳べてお母さんが「あー、

うちの子もちよつとは跳べてるわあ」と安心

するのと、運動会では全く跳べなくても、

(「その日はちよつと喜べなくても)その後自

分から進んで跳べるようになるのではどつ

ちが良いですか？」と聞きました。勿論後者

です。そこで、本人の気持ち(「今はやりた

くない)を尊重してもらいました。その子

は、全くしませんでした。友達が跳んでい

るのをちゃんと見ていました。

第二段階は、やる気を認める」です。その

子は二学期後半跳び始めましたが、すぐ止

めていました。でも自分からした姿勢はた

くさん誉めました。その結果が年賀状です。

独り言

何でもかんでも
待つていけば良い
とは思っていませ
ん。示すべきこと
教えるべきことは
あります。

生活習慣として
身に付けるべきこ
と(早寝・早起き・
挨拶・マナー等)
は待つていても育
ちません。

ただお母様方か
らよく耳にする、
「文字の読み書
き」といったもの
のは、本人が興
味・関心を示して
いない時期に無理
矢理やらされると
逆にトラウマにな
つてしまうので、
待つて欲しい(本
人が興味を示すそ
の時まで)と思つ
ています。

確かに困る時期
はありますが、ど
こかでちゃんと追
いつきます。大切
なのは待つべきこ
とと教えるべきこ
とを混同しないこ
とです。 柿原 勝

ふぞく新聞

2月8日(金)

Vol. 17

(Vol.94)

幼稚園時代の思い出

冬休みに、卒園した園児が三名幼稚園に遊びに来てくれました。現在中学一年生で、もう幼稚園時代の記憶なんて・・・と書いていましたが、園舎に入ってくるなり「懐かしい！」わあ、変わってない」なんか広くなってる」と友達同士で色々話が盛り上がっていました。

驚いたのは、お泊まり会の時に誰と一緒に寝たかを鮮明に覚えていて、私は〇〇ちゃんと寝たなあ」と言えば、私は△△ちゃん」と、つい最近の出来事のように何気なく話している姿でした。

私は肝だめしが怖くて泣いた」という話が出れば、あの時(カメラの)シャッターが光って怖かった」とすぐにそのシーンの話に・・・。

短い時間でしたが、幼稚園時代の話は次々とでてきて、聞いているだけで嬉しく思えました。

三人の話はまだ続き、クリスマスの時にサントさんがプレゼントしてくれたインコの話。お遊戯会で僕がピアノを間違った話。お弁当を残したのに、残していないと言って怒られた話。豆まきの時、鬼が怖くてトンネルの中に隠れていた話。幼稚園で飼っていたうさぎの話。グラウンドで花火をした話等々。

この三人は幼稚園時代毎日元気よく遊んでいました。幼稚園時代遊んでばかりいたから、小中学校で勉強が全く出来なくて困ったわけではなさそうです。

義務教育ではないのに、幼稚園に行くことが珍しくない今、色々と特色を出すために『子ども達の為に』という名のもと色々なことを取り入れて活動していますが、遊び」という土台を決して忘れてはいけません。

幼稚園時代の思い出は、楽しい思い出であればいいと心から願うのでした。

独り言

以前、学習会で就学前の学習について幼稚園の先生と児童館の指導員と話し合ったことがありました。

「幼稚園や保育園によつては、かなり文字を教えたりしていて、一年生の段階で差が生まれているのですが、それについてどう思いますか？」と聞かれました。

僕も他の幼稚園の先生も「必ず追いつく時がくるから、例えば一年生でそのような問題が生まれたとしても、幼稚園でドリルのような学習をするべきではない。」と答えました。(本人が興味をもって家等で行うのは自由ですが、幼稚園で一斉にすべきでは無いという意味) 早期に身に付けるべきものは学習ではなく、生活習慣だと思っております。 柿原 勝

ふぞく新聞

2月22日(金)

Vol. 18

(Vol.95)

負ける練習！！

相田みつをさんの本の中に『負ける練習』という言葉があります。最近この言葉の重みを子ども達を見ていて痛感することが多くあります。

子ども達は負けること＝「ダメ」「悪い」「弱い」というイメージを強く持っている子が多いように思います。だから、負けそうになると途中でやめたり、負けそうな遊びは最初から参加しない子も結構います。

それを全て最初から否定はしません。その気持ちも、分からないではないからです。但し気をつけなくてはいけないのは、「買けると泣くから、騒ぐから、怒るから」とその後の対処が大変だという理由のみで勝たせたりするのはどうでしょう？「これは、子ども達に勘違いをさせてしまいます。ある遊びの場面から僕は学びました。

みんなでドッジボールをしていました。その園児は当てられるまではとても楽しく参加していました。しかし、終了間近で当てられてしまい、アウト(外野)になってしまいました。ダブルショックなことに、その園児のいるチームが負けてしまいました。

その園児は一人走っていき部屋で泣いていました。こんな時、色々と声を掛けるのも必要ですが、その子はすぐに納得するタイプの子ではありません。そこで、みんなに、又その子に聞こえるように負けて悔しいと思って泣くのは恥ずかしいことじゃない。それだけ一生懸命したのだからとっても良いこと」ただ、泣いても先生は勝たせてあげたりはしないから。だってウソの勝ちなんてみんなも嬉しくないと思うから」と言いました。泣きながらその子も、他の子もちゃんと聞いていました。その続きは……

独り言

上段で話している僕の心理としては、そうは言ったものの、どうかなあ？伝わっているかなあ？と心配でもありました。

そ、迷いを見せてはいけないうと少々突き放し気味に話したのです。

その数日後、相撲大会がありました。子ども達は、負けて確かに悔しうでした。でも、気持ちの面では負けていませんでした。負けても挑戦する気持ちを保持して望んでいました。

泣いてもいいじゃないですか。その時大変でもいいじゃないですか。その時、大人も一緒に手をかけ、心をかけるのが大切なのだと思います。負けることの方が多いのです。生は。柿原 勝

ふぞく新聞

3月7日(金)

Vol. 19
(Vol.96)

先生の喜び！！

子ども達から **せんせい**と呼ばれるようになって十二年半が経ちました。

始めは自分の為にこの仕事を選んだのです。

「つまでも大切な気持ちを持ち続けることが出来るように、そして忘れないように」でも、それ以上の喜びがこの仕事にはありました。

子ども達は、まっすぐに **先生、僕ね、勝先生の**こと好きだよ」また明日も先生と遊びたいなあ」

今度の日曜日家においでよ。出掛けるから一緒に行くよ」明日はどんなことをするの？またヌシ来るかなあ？」と僕をどんどん元気にしてくれました。

そして、その喜びは卒園で決して終わらず、卒園しても続きます。 **先生、変わらないね**と声を掛けてくれた子は、大きくなっていました。

僕の大学時代の友達に言われたことがあります。おまえが一番ええわあ！」仕事

が楽しそうやもん」と。

その友達は、きつと無いものねだりでそう

言ったので、そんなことないでえ、みんな

の仕事もイケてるやんか」と答えました。

ただこうも付け加えました。確かに仕事は

楽しいわあ。大変な時も勿論あったりする

けれど、子ども達は決して裏切らへん！」

子ども達は、一生懸命やったら、それに

対してちゃんと笑顔で応えてくれる」と。

先生の喜びって、この姿勢を持てることな

のかもしれない。やはり一番大切なこと

は、結果を出すことだけではなく、一生懸

命やってみる」とだと思っのです。

だから本当にありがとうなのです。子ども

達によって、僕ら先生は生かされているので

独り言

まだまだ経験が足りない僕ですが、平成二〇年度の園長になります。

担任から外れるのは確かに残念なことではありますが、これからの僕の喜びは先生方が子ども達・保護者の皆さんから誉められることです。

ですから、先生方の良いところがあれば、どんどん伝えて下さい。先生も子ども達と同じで誉められることで伸びるのです。

それと、僕がこれから力を入れていきたいのは、子ども達からたくさん教わってきた大切なことを、先生方、保護者の皆様、そしてこれから先生を夢見ている学生達に分かり易く伝えていくということです。

柿原 勝